The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トゥムシュク語の穀物を表す名詞(I) : Tumsh. gorsa-/gaursa- について
Author(s)	荻原, 裕敏; 慶, 昭蓉
Citation	内陸アジア言語の研究. 2022, 37, p. 49-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 37, 2022.11, 49–61

トゥムシュク語の穀物を表す名詞(I)
— Tumsh. *gorsa-/gaursa-* について—

荻原裕敏*
慶　昭蓉**

導入

コータン語（于闐語，Khotanese）及びトゥムシュク語（拠史徳語，Tumshuqese)(1)の概説として知られる Emmerick (1989) 並びに Maue (2009) によるトゥムシュク語文献の暫定的な整理・紹介を通して，世俗文書がトゥムシュク語文献の大部分を占めることが知られるようになった．この点は，我々の調査によっても裏付けられている(2)．本稿では，亀茲語(3)の穀物を表す名詞を再検討した Ching (2010, 2016) の成果，及び故・北京大学教授段晴 (2021) によって出版された，黄文弼文書の 2 点のトゥムシュク語世俗文書 (H111, H112) に基づいて(4)，先行研究では殆ど扱われたことのないトゥムシュク語名詞 *gorsa-/gaursa-* について検討する．また，本稿で扱う *gorsa-/gaursa-*

---

* フランス東アジア文明研究センター・連携研究員（OGIHARA Hirotoshi. Membre Associé, Centre de recherche sur les civilisations de l'Asie orientale, CNRS）

** 京都大学白眉センター/人文科学研究所・特定准教授（CHING Chao-jung. Program-Specific Associate Professor, The Hakubi Center for Advanced Research & Institute for Research in Humanities, Kyoto University）

(1) トゥムシュク語は中期イラン語に属する言語で，言語学的にコータン語との関係が最も近い言語である．トゥムシュク語及びトゥムシュク語文献全般については，荻原・慶 (2014) を参照．また，トゥムシュク語の歴史的背景を明らかにした榮新江 (1992) も参照．

(2) Ogihara and Ching (2012), 圖木舒克市文物局 et al. (2014), 荻原・慶 (2014), Ogihara and Ching (2017), Ching (2019), Ogihara (2019a; 2019b) を参照．本稿では，荻原が，文法的分析及びトゥムシュク語の語分割の大部分を担当した．また，世俗文書としての文書全体の解釈，特に新しく指摘された穀物並びに計量単位を表す語の解釈は，慶による裏付けと部分的修正を経ている．なお，導入と結論は慶が担当し，その他の部分は荻原・慶の共同執筆による．

(3) 本稿では，夙くに S. Lévi が提案し，またそれを承けた H. W. Bailey に倣い，所謂「トカラ語 A」「トカラ語 B」を，それぞれ「焉耆語 (Agnean)」「亀茲語 (Kuchean)」と称する．また，トゥムシュク語文献に見える 'Fremdzeichen' の音素転写方式は，Maue (2009) の提案に従う．

(4) この 2 点の文書が存在する可能性は，Ching (2010: 82–83) 及び慶 (2012) で初めて指摘された．原文書の現在の所在は不明であるが，黄文弼が胡適に宛てた書簡（1931 年 7 月 19 日付）に同封され，現在は中国社会科学院近代史所に保管されている写真を参照することができる．同書簡に保存された写真発見の経緯については，劉 (2014, 2016) を参照．また，「黄文弼文書」の命名とその意義は，榮 (2013) で言及されている．なお，H111 及び H112 の解読は，2021 年 8 月 27–30 日に荻原と Maue によってクロスチェックされた．本稿における H111 からの引用は，この時に作成されたものに基づいている．この 2 点の文書全体の改訂版を，現在準備中である．

を含めて，穀物及び穀物からの加工品を表すトゥムシュク語名詞については，別稿として ‘Miscellany on the Tumshuqese documents: Part III —Words relating to cereals—’ を準備中である．

1. 文脈及び書式の観点からの検討

トゥムシュク語の *gorsa-/gaursa-* は，先行研究では十分に説明されたことがなかったが(5)，黄文弼が中国新疆地域で発掘したトゥムシュク語世俗文書 H111 における新しい在証例は，我々に解決の糸口を与えることとなった．我々が知り得ている限りでは，*gorsa-/gaursa-* に関連すると見られる語形は，以下の通りである．

gorsi	Pelliot Fragments divers Douldour-âqour fragment D a3, 4!, 6, 7
	H111, line 6
gaursu	H111, lines 4, 5(6)
gorsā/gaursā	H111, line 4(7)

これらの在証例から，*gorsa-/gaursa-* が a 語幹名詞であると想定すると，*gorsi*, *gaursu* 及び *gorsā*/*gaursā* は，それぞれ単数主格，単数対格，単数属格・与格の形式であると見做すことができる．この分析に基づいて，ペリオ収集文書断片群中の Pelliot Fragments divers Douldour-âqour の Fragment D 表面に見える文脈を(8)，我々は以下のように解釈した．

Line 3] *g₂ā gorsi acc^{h}i: jahä śo* |
「[…] に対して，*gorsa* が支出された：1 *jaha*.」
‘To(?) […], *gorsa* went out: one *jaha*.’

4 | *buṣāndog₂i go*(*rsi acc^{h}i*) [...]
「**buṣānda* に属する(?) *gorsa* が支出された […]」
‘*gorsa* of/belonging to(?) **buṣānda* went out, […]’

6] *x₈amog₂ā gorsi acc^{h}i: nä pme*(*ñci*) […]
「[…] *?-*x₈ama* に属する者に対して(?)，*gorsa* が支出された：9 *pmeñci*.」
‘[…] to the one belonging to *?-*x₈ama*, *gorsa* went out: nine *pmeñci*s. ’

---

(5) Ogihara (2021: 150, n. 3) が「食物或いは穀物の名称(?)（‘name of food or cereal(?)’）」という暫定的な語義を与えているに過ぎない．

(6) 段 (2021: 5, 9–10) は，この語を含む箇所をそれぞれ複合語 *gautsu-kāra* 及び *gautsu-naro* と解読して，その前分 *gautsa-* (> *gautsu*) を古代イラン語の *gau-*「牛」と接尾辞 **-tsa* によって派生された「牲畜群」とみなし，複合語 *gautsu-kāra* を「従事放牧的人」，*gautsu-naro* を「従事畜牧業的人」と解釈している．この解釈を修正すべきことについては，第 3 節を参照．

(7) この形式は *gaursā-d₁e kārkye* という文脈に現われる．これを段 (2021: 5, 9–10) は *gau-tsāḏekā*「牧群之冨」と *kye*（疑問・関係代名詞）に誤読した．

(8) Pelliot Fragments divers Douldour-âqour については，Berthier and Cohen (2002: 110) を参照．

7　*b*(*u*)*ṣān*(*d*)*o*(*g*$_2$)*i*　*gorsi*　*a*(*cc*^{h}*i*) […]

「**buṣānda* に属する(?) *gorsa* が支出された：[…]」

'*gorsa* of/belonging to(?) **buṣānda* went out: […]'

この世俗文書に見える ?-*x*$_8$*amog*$_2$*ā*[9], *buṣāndog*$_2$*i* 及び以下に取り上げる H111 の *khāzog*$_2$*u* は，全て接尾辞 -*og*$_2$*a*- の存在を示している．この接尾辞の意味は確定できないが，暫定的に「～に属する，～から，～の」といった由来・起源を表しているものとして和訳した．この推定が正しいならば，?-*x*$_8$*amog*$_2$*ā* 及び *buṣāndog*$_2$*i* は，それぞれ単数属格・与格形及び単数主格形と見做される一方，*khāzog*$_2$*u* は単数対格形に分類される[10].

なお，当該断片 Fragment D に附された記号は F.M. 895 であるが，'F.M.' は発見場所を示す記号 (*cote de trouvaille*) ではない．Pinault (2007: 172) が言及しているように，恐らく 'F.M.' は 'Fonds manuscrits' の略号であり，'Pelliot Divers' とその下位分類である 'Pelliot Fragments divers Douldour-âqour' に関する Cohen の記述 (Berthier and Cohen 2002: 110) から[11]，この分類に付与された 'Douldour-âqour' (D.A.) という遺跡を表す記号は，敦煌ではなく庫車 (Kucha) 地域出土と考えられる雑多な非漢字文献を表すために，20 世紀後半に図書館の司書が与えたものである可能性が極めて高い．慶によると，ペリオは圖木舒克（Tumshuq）と托庫孜薩来（Toqquz Saray）で数点の漢文文書を発見しているが[12]，恐らく 1980 年代に Fonds Pelliot に属する文書が再整理された際，それらの漢文文書は 'Pelliot Chinois Douldour-âqour' に分類されたと考えられる[13]．換言すると，同じような文書の混同がブラーフミー文字文書にも生じたかも知れず，もしそうであるならば，Fragment D は庫車周辺の渭干河 (Muzart Darya) 沿いの夏克吐爾遺跡（スタインのいう Duldur-Akhur, ペリオのいう Douldour-âqour）に位置していた唐代亀茲の仏教寺院の文書であるとは限らず[14],

---

(9) ここでは，疑問符は新出語の語頭の失われた部分を示している．

(10) この推定に従えば，Ogihara (2021: 154) で *k*^{h}*aṣo g*$_2$*i* と分割され，*k*^{h}*aṣa*-「喀什噶爾（Kashgar）」の複数具格・奪格形と解された TS41, line 1: *k*^{h}*a ṣo g*$_2$*i* は，語義として「喀什噶爾に属する/の/から（'belonging to/of/from Kashgar'）」を有する新しい形容詞 *k*^{h}*aṣog*$_2$*a*- の単数主格形として解釈される．なお，音素 /dz/ は，Maue and Ogihara (2017) で推定された <x$_8$> ではなく，むしろ <g$_2$> に付与されるとする，Maue (2022) の新しい解釈を採用すれば，トゥムシュク語接尾辞 -*og*$_2$*a*- は，Degener (1989: 175–176) が 'die superlativische, einen relativen lokalen oder temporalen Standort bezeichnende Bedeutung' という語義を有する形容詞派生接尾辞と解釈するコータン語接尾辞 -*auysa*- と比較可能である．

(11) 我々は，2014 年の年末までに，Pelliot Fragments divers Douldour-âqour に属する全ての断片のマイクロフィルム及び原文書の調査を完了している．

(12) Paul-David, Hallade and Hambis (1964: 113).

(13) Trombert (2000) 及び慶 (2011) が指摘するように，Pelliot Chinois D.A. (= Douldour-âqour) の文書群には，Subashi 及び Hiçär と言った，別の遺跡から齎された文書を含むことが知られている．

(14) 我々が，2008 年から 2010 年にかけて Pelliot koutchéen nouvelle série (PK NS) の文書を調査した際，Ogihara (2015: 88–89) によって出版されたトゥムシュク語文書 PK NS 269 には，脆い小紙片が付されていた．この小紙片は，現在 Gallica (gallica.bnf.fr) で閲覧可能なデジタル画像では確認されないが，文書の *cote de trouvaille* として 'DA fd' という記載を読むことができた．Pinault (2007: 172) が説明するように，'DA fd' は「種々の発掘（場所に由来する）」(*fouilles diverses*) を意味する．従って，対応する文書にこの小紙片が正しく付されており，尚且つ我々の小紙片の読みが正しいならば，PK NS 269 は，Duldur-Akhur 遺跡，或い

托庫孜薩来周辺の仏教寺院の文書であったということになる[15].

Fragment D に見える 4 つの在証例のうち 3 例は，トゥムシュク語動詞 *c(c)^h-* の三人称単数能動態未完了過去・指令法の形式である *acc^{h}i* と結びついている．この *c(c)^h-* の原義は「行く（‘to go’）」であるが，Fragment D の文脈においては，以下に検討するように「支出される」と解釈できる．注目に値するのは，以下の例文のように，亀茲語動詞 *lä-n-t-*「行く，出る（‘to go out’）」及び *i-*「行く，出る（‘to go out’）」を用いた同様の構文が，亀茲語仏教寺院会計文書に広く存在している点である[16].

Pelliot Koutchéen Douldour-âqour M.507(8) a14

ṣkacce meñameṃ rāp tänktsi kapyāres śeśusa śwelyāṅk āyusa ysāre laiś: cakanma 49

「六番目の月から *Rāp*（の日）まで，浄人達によって食べられた分，（及び）「税糧（Kuch. *śwelyāṅk*）」として（或いは「税糧のために」）差し出された小麦が支出された：49 石[17].」

‘From the 6th month until the (day of) *Rāp*, the wheat eaten by *kapyāre*s (and) given to/as the tax (paid in) grains has been spent: 49 piculs.’

THT 2724, line 4

/// (śak-ṣka)[s]n[e] sāṅkiś ṣalywe masa: sanai ///

「16 番目の日に，僧伽に油（或いは「酥」）が支出された：1 […][18]」

‘[…] [on the sixteenth day], for the *saṃgha*, the oil/ghee was spent (lit. ‘went’): one […]’

亀茲語寺院会計文書では，「出て行った（‘went out’）」を表す亀茲語動詞 *masa*（動詞 *i-* の三人称単数過去形）及び *laiś*（動詞 *lä-n-t-* の三人称単数過去形）[19]は，「支出された，消費された，持ち出された（‘was expended, consumed, taken out’）」を意味する．また，焉耆語動詞 *läc*（*lät-*「行く，出る（‘to go out’）」の三人称単数過去形）による同様の構文が，ドイツ所蔵の世俗文書 THT 1519 に見える[20].

はその周辺の遺跡に由来するトゥムシュク語文書ということになる．

(15) Paul-David et al. (1964: 113) によれば，nº 410 に加えて，托庫孜薩来で発見された文書の内，nº 413 及び nº 418 のみがフランス国立図書館に所蔵されているようである．この点から，Couvreur (1965: 120–121) が ‘Fragment Koutchéen 418’ として出版し，Pinault (2007: 206) が言及しているサンスクリット断片は，実際には nº 418 に属する 4 点程の文書の内の 1 点であったと，我々は考えている．

(16) Ching and Ogihara (2010: 115–116).

(17) 唐代に穀物で支払われる「税糧」として解釈された亀茲語名詞 *śwelyāṅk* については，Ching and Ogihara (2010: 108–109) の慶による説明を参照．ここでは，Ching (2010: 134) 及び Ching and Ogihara (2010: 109, n. 79) で与えた英訳を若干修正している．なお，「税糧」については，本号所収の慶 (2022) を参照．

(18) Ching and Ogihara (2010: 116) で与えた本用例中の *saṅkiś* は校正ミスによるものであるため，ここでは正しい形式である *sāṅkiś* に修正している．

(19) 亀茲語 *laiś* の標準的な語形は *lac* であり，この語形の詳細については Pinault (1994: 108) を参照．

(20) この文書については，Ogihara (2014: 116–120) を参照．文中の *klaṣt* は石や升で計量されているので，何らかの飲料や穀物またはその精製品（油など）と推定されるが，具体的な語義は不明である．

THT 1519, line 2

/// *la śräyāsac (k)laṣt läc: [w]e [śā]käṃ*

「[…] 長老達に，*klaṣt* が支出された：2 石.」

‘[…] to the elders *klaṣt* was spent (lit. ‘went’): two piculs.’

THT 1519, line 4

/// *wsokäṃ läc: we [ś]āṅkāṃ 2. klaṣt läc: 6 pā(räs)*

「[…] *wsok* が支出された：2 升，*klaṣt* が支出された：6 *pāra*(?)[21].」

‘[…] *wsok* was spent (lit. ‘went’): 2 pints. *klaṣt* was spent (lit. ‘went’): 6 *pāras*(?).’

亀茲語と焉耆語に見える，これらの用法は，明らかにトゥムシュク語の *acc*^{h}*i* と比較可能である．この対応に基づいて，Ogihara (2015: 88; 2021: 153–155) で述べたように，数詞 *śo*「1, 一（‘one’）」及び *nä*「9, 九（‘nine’）」と結びついているトゥムシュク語の *jaha-* と *pmeñci* は，計量単位を指す 2 つの名詞である可能性が高いと推定される[22]．この荻原の推定に基づき，慶は，トゥムシュク語の *jaha-* を漢語「石」（EMC *dʑiajk；亀茲語 *cāk*；焉耆語 *śāk*；バクトリア語 σαγο）の借用語とみなすことができると考える[23]．すなわち，トゥムシュク語の *gorsa-*/*gaursa-* は「石（*jaha-*）」で計量される何らかの物品，具体的には穀物や食品・飲料であった可能性が高い．

亀茲語，焉耆語及びトゥムシュク語において，持ち出した者，或いは消費した側の主体が明示・特定されない場合，支出を表す書式は非常に類似しており，この構文は以下のように定式化される[24]．

---

(21) Sogd. *p’r* ‘unit of liquid volume (120 galons)’ (Gharib 2004: 258b) 及び Khot. *pāra-*「計量単位（容量単位もしくは重量単位）（‘a measure’）」(Bailey 1979: 231) に基づいた荻原の推定 (Ogihara 2014: 111–112) によれば，焉耆語 *pār** は中期イラン語からの借用語と見られる．

(22) 以前 Ogihara (2020: 19, n. 34) で推定された，計量単位を表す名詞の語幹 *k*^{h}*ā-* に代わって，Ogihara (2021: 155) では，*k*^{h}*a*/*ka*, *k*^{h}*o*, *k*^{h}*ayo* といった形式に基づいて，語幹 *k*^{h}*aa-* が推定された．しかしながら，コータン語では，*kha* が穀物の計量単位として使用されるだけでなく，この *kha* がチベット語の借用語であると推定される点 (Emmerick 1985: 301–302) は，注目に値する．もしこの推定が正しいならば，尼雅 (Niya) 出土のガンダーラ語文書に見える，有名な計量単位 *khi* との関係が解決されるべきではあるが，トゥムシュク語名詞 *k*^{h}*a*/*ka* も，コータン語 *kha* と同様の起源に遡るかも知れない．本稿では，コータン語 *kha* をトゥムシュク語 *k*^{h}*a-*（単数主格形は *k*^{h}*a*）の同源語と暫定的に見做し，*k*^{h}*o* をトゥムシュク語 *k*^{h}*a-* の単数対格形と解釈した．即ち，この語形には，二重母音 *-au* の *-o* への単純母音化 (*k*^{h}*a-* + *-u* > **k*^{h}*au* > *k*^{h}*o*) が含まれている．同様に，複数奪格・具格形では，語尾 *-yo* が語幹 *k*^{h}*a-* に附された (*k*^{h}*a-* + *-yo* > *k*^{h}*ayo*) と見做すことが可能である．

(23) 焉耆語の形式については，Ogihara (2014) を，またバクトリア語の形式については，Sims-Williams (2002: 233; 2007: 261) を参照．2022 年 6 月 23 日のライデンでのワークショップの際，N. Sims-Williams 教授から，ソグド語の *š’x*（或いは *š’γ*, cf. Sims-Williams and Hamilton 1990: 46）が，トゥムシュク語 *jaha-* と比較され得る点，ご指摘頂いた．即ち，当該のソグド語の語形は，トゥムシュク語 *jaha-* と同様に，中古漢語の末尾子音 *-k* に対して摩擦音を対応させている．N. Sims-Williams 教授に，心よりお礼申し上げる．なお，この漢語の借用の歴史的背景と過程は，言語学的観点からのみではなく，歴史学的観点からも検討が必要である．

(24) 亀茲語と焉耆語の構文で斜格形が使用される点については，それぞれ Ching and Ogihara (2010, Appendix I)

亀茲語	物品 + *lac* / *masa* + 量(斜格形)
焉耆語	物品 + *läc* + 量（斜格形）
トゥムシュク語	物品 + *acc*^{h}*i* + 量（主格形/対格形）

換言すると，これらの言語では，通常定動詞が文末に置かれるのに反して，この種の書式では，量を表す補語が動詞に後続し，文末に置かれていることになる．

2. 語源の観点からの検討

我々の見解では，コータン語 *gau'sa-*「粟 (foxtail millet, *Setaria italica*)」が[25]，トゥムシュク語 *gorsa-*/*gaursa-* に対応する形式である可能性が極めて高い．Bailey (1979: 91) は，この語に対して語源を与えていないが，MP *gāvars*, Yidγa. *γavarso*, Pashto *γōṣ* といった，彼によって引用されたイラン語の同源語は，コータン語 *gau'sa-* が Morgenstierne が与える古代イラン語の推定形 **gawarsa-* (Morgenstierne 2003: 34, *γoxt* 'millet (*Setaria italica*)')[26] に遡ることを示している．実際，Bailey (1985: 12) は，コータン語 *gau'sa-* の *-au'-* が **-āvar-* に遡ると推定しており，この推定は，Bailey が，コータン語 *gau'sa-* の語源として **gāwarsa-* という形式を想定していたことを裏付けている．

歴史音韻の観点からは，古代イラン語 **-rs-* が古期コータン語では *-ls-* に変化することが知られている (Emmerick 1989: 212, Skjærvø 2022: 123b)．加えて，以下の例が示すように，古期コータン語 *-ls-* の *-l-* が，後期コータン語では脱落するとともに，一般に先行母音の口蓋化が引き起こされることも，既に指摘されている．

Khot. *puls-*「尋ねる（'to ask'）」	>	LKhot. *pva's-* (*pvai's-* etc.)
Khot. *tcahaulsä*「40, 四十」[27]	>	LKhot. *tcahau'sä*

残存しているトゥムシュク語文献の数がきわめて少ないため，*-ls-* を有する古期コータン語に対応するトゥムシュク語の同源語は網羅的には確認できないが，幸いにして，上に引用したコータン語 *puls-* にはトゥムシュク語 *purs-*「尋ねる（'to ask'）」を同源語として想定でき[28]，またコータン語 *tcahaulsä* とトゥムシュク語 *tshārsa*「40, 四十」も明らかに同源である．このような対応

及び Ogihara (2014) を参照．また，Hitch (1987: 59–60) は，トゥムシュク語において，主格形と対格形の双方が使用される点を指摘している．

(25) Bailey (1979: 91) によれば，コータン語 *gau'sa-*「粟 ('foxtail millet')」は，Skt. *priyaṅgu-* 及び Tib. *khre* の訳語として用いられる．なお，コータン語の形式と語義については，漢語・コータン語の二言語による木簡中の対訳に基づいた Rong and Wen (2008) を参照．

(26) これ以外の語源としては，**gawarśa-* (Расторгуева и Эдельман 2007: 214, Witczak and Novák 2016: 60) や **gāwərca-* (Kümmel 2017: 284) がある．

(27) 古代イラン語の語形としては，Av. *caθβārəsatəm* (Bailey 1979: 138) を参照．

(28) Tumsh. *pursāka-*「尋ねる者（'inquirer'）」，Tumsh. *pursickari-*「調査（'investigation'）」は，この動詞 *purs-* から派生した名詞と推測される．後者とこの動詞との関連については，Bailey (1979: 246) が Khot. *pūś-*「唱える，読む（'recite, read'）」の項目で指摘している．

に基づけば，古期イラン語からコータン語及びトゥムシュク語に至る音変化を，以下のように定式化することができる．

OIr. *-*rs*- > OKhot. -*ls*- (> LKhot. -*'s*-) = Tumsh. -*rs*-[29]

一方，母音対応: Tumsh. -*o*-/-*au*- ~ Khot. -*o*-/-*au*-は，Tumsh. *ror*-「与える（'to give'）」~ Khot. *hor*-/*haur*-「与える（'to give'）」< OIr. **fra-bara*-から支持される[30]．従って，Khot. *gau'sa*-は，**gaulsa*-の後期コータン語の形式であり，この語をトゥムシュク語 *gorsa*-/*gaursa*- の同源語と見做すことに問題はない．

3. 黄文弼文書 H111 に見える在証例の検討

第 1 節及び第 2 節では，トゥムシュク語 *gorsa*-/*gaursa*- が現れる構文と語源の両面から，この語がコータン語 *gau'sa*-「粟（'foxtail millet'）」に対応する点を検討した．すなわち，この *gorsa*-/*gaursa*- も「粟」をさしたと推測される．本節では，この新しい解釈の妥当性を検証する．

我々の新しい解釈を黄文弼文書 H111 の用例に適用するとともに，共起している *śindā*「大地，地面（'soil, ground'）」及び *k*^{h}*āzu*「食物（'food'）」という語を考慮に入れると，これらが在証される文脈には暫定的に以下のような音素転写と訳文を与えることが可能である．

H111, lines 4–5

b(i)d$_1$*i śindā pariste, v*$_1$*ara ṣe gaursu kāra. gaursā-d*$_1$*e kārkye khāzog*$_2$*u ro* × [a broken text of ca. 2 akṣaras] *ñce risa* •

「また，土地が回復(?)すれば，そこにあなたは粟（*gaursa*）を植えなさい(?)．粟（*gaursa*）の耕作者達(?)は，あなたに食糧の […] **risa*(?) […] を与える(?)ことになっている．」

'Then the piece of soil recovers(?), there you should plant(?) foxtail millet (*gaursa* "*Setaria italica*"). The cultivators (?) of foxtail millet (*gaursa*) give(?) to/for you […] of food(?) […] **risa*(?).'

ここでは，トゥムシュク語 *pariste* を動詞 *paris*-「戻る(?)（'to return(?)'）」の三人称単数現在中動態の形式と解釈し，「回復する(?)（'recovers(?)'）」と和訳した．このトゥムシュク語動詞は，イラン語 **pari-is*- (cf. Cheung 2007: 154–157) に遡るかも知れない．

---

(29) 無声摩擦音 -*s*- に対応する有声摩擦音 -*z*- でも，同様の変化が生じたことが知られており，この音変化は，OIr. *-*rz*- > OKhot. -*lys*- (> LKhot. -*'ys*-) = Tumsh. -*rz*- として定式化される．この音変化は，以下の対応によって支持される： Khot. *balysa*- 'knower of religious utterance' > 'Buddha' (> LKhot. *be'ysa*-) : Tumsh. *bārza*- < **barz*-/*braz*- (Bailey 1979: 272); Khot. **nalysv*- 'to issue' (> LKhot. *na'ysv*-) : Tumsh. *narz*- < **ni-raz*- (Hitch *apud* Skjærvø 1987: 79).

(30) コータン語の音韻変化については Emmerick (1989: 212) を参照．理論的には，古期イラン語 **fra-bara*- は，母音間の **b*- の半母音化により **fra-wara*- に変化したと考えられる．なお，音変化 Khot. -*o*-/-*au*- < OIr. **ava*- の例として Emmerick が挙げている数詞「90」は，トゥムシュク語には知られていない．また，Khot. *śśau*「1, 一（'one'）」及び Tumsh. *śo*「1, 一（'one'）」(< **śśāva*-, cf. Bailey 1979: 40) が，この母音変化に相当するか否かは，この語源が定かではないため，不確実である．

H111, line 5

ka ṣe gaursu naro, tsa v₁ara gox₆ā c^{h}indi. menu we āru k^{h}āzu azu ro(r)i

「彼らは粟（*gaursa*）（を蒔く(?)）準備ができたら，そうすれば牛の群れ(?)がそこに来るだろう．（そして）私は，この **āra* を（彼らの(?)）食料として与えよう．」

'When they are able/ready (to sow?) foxtail millet (*gaursa*), then the herds of cattle(?) will go there. [And then] I will give this **āra* as (their?) food.'

この用例では，トゥムシュク語 *naro* を新しく在証された動詞 *nar-* の定動詞形と見做した(31)．この動詞は，イラン語 **Hnar-*「可能である，熟練した（'to be able, skilled(?)'）」(Cheung 2007: 182–183) と関係づけられるかも知れない．もしそうであれば，この動詞は，この文脈において，字義的には「働くことができる/準備ができている（'to be able/ready to work'）」を意味しているかも知れない．また，動詞 *c^{h}indi*「（彼ら／それらが）行く（'they go'）」が複数形であることから，先行する名詞 *gox₆ā* は，*gox₆a-* の複数主格形と解釈できる(32)．

なお，この用例と次の用例に見える *menu* を，ここでは暫定的に指示代名詞 *ma-*「これ（'this'）」の男性単数対格形と見做した．この代名詞の単数主格形，具格・奪格形，処格形は，それぞれ *mā/mhā*, *mena*, *mene*（また，異形態として *mne/mnai*）である．この *menu* が指示代名詞 *ma-*「これ（'this'）」の男性単数対格形という解釈が正しいならば，後続する *āru* も同じ語尾 *-u* を示すため，名詞 *āra-* の男性単数対格形となる．そして，この新たに分析された名詞 *āra-* は，**HarH-*「（穀物を）挽く（'to grind (grain)'）」(Cheung 2007: 166) から派生したと思われ，「挽かれた穀物（'ground grain'）」を意味していたかも知れない(33)．

加えて，上に挙げた指示代名詞 *ma-*「これ（'this'）」の諸形式から，Maue (2016: 128) によって指摘された指示代名詞 *t^{h}a-*「あれ（'that'）」が，単数主格形：*t^{h}ā*, *t^{h}a*, 具格・奪格形：*t^{h}ena*, 処格形：*t^{h}ene* の形式を有していたことを推定することができる(34)．この場合，指示代名詞 *ma-*「これ

---

(31) この文書では，字符 <na> は，<ta> とかなり明確に区別されているため，*taro*「このように（'thus'）」と判読することはできない．第 1 節も参照．

(32) トゥムシュク語 <x₆> が，前舌母音に後続する，古代イラン語の母音間の /θ/ に由来する (Dragoni 2020) ことから，Tumsh. *gox₆a-* を YAv. *gavaiθya-*「牛の群れ（'Rinderheerde'）」 (Bartholomae 1904: 510) と関係づけることが可能である．この Avesta の語については，Расторгуева и Эдельман (2007: 208–209) も参照．

(33) 動詞 **HarH-*「（穀物を）挽く（'to grind (grain)'）」から派生した名詞としては，他にも Tumsh. *ārda-*「穀類の粉（'flour'）」が挙げられる．この名詞は，トゥムシュク語文書 Pelliot fragments divers Douldour-âqour の Fragment H (line 2) に一度だけ在証されるが，文脈と音変化 (OIr. **-rt-* > Khot. *-ḍ-* = Tumsh. *-rd-*, cf. Bailey 1950: 666; Emmerick 1989: 215; Skjærvø 2022: 123b) から，コータン語 *āḍa-*「穀類の粉（'flour'）」 (< OIr. **ārta-*, Bailey 1979: 17, *āḍä*) の同源語と推定される．以下に，在証例と訳文を挙げる．

Pelliot fragments divers Douldour-âqour Fragment H, line 2

wrāṣireza ārdu ba(*ri*) […]「Wrāṣireza は麺粉（*ārda*）を（持ってきた）[…]」

'Wrāṣireza (brought in / took in) flour (*ārda*), […]'

なお，この語に関する詳細については，別稿 'Miscellany on the Tumshuqese documents: Part III —Words relating to cereals—' を参照．

(34) 従って，従来 *kte* と転写されることが多かったトゥムシュク語 *kne* は，関係詞 *ki*（属格或いは斜格形は *kye*）

（‘this’）」の帯気性を伴った主格形 *mhā* は，*tʰa-*「あれ（‘that’）」の主格形 *tʰā, tʰa* からの類推によるものであろう．

H111, line 6

ka × gorsi pye(d)e, biśe menu (w)e bivʲemu •

「粟（*gorsa*）が […] 然るべき状態になった(或いは「熟した」)ならば，私はこれを全てのものに分配(?)するだろう．」

‘When foxtail millet (*gorsa*) is appropriate/mature(?) […], I will distribute(?) this to/for all.’

ここでは，*pyed* を初出の動詞 *pye-*「(収穫に(?)) 適している，熟する（‘to be appropriate (to harvest?), to mature’）」< PIr. **pati-Hai-*「正しい，適切である，必要である（‘to be right, fit, necessary’）」(Cheung 2007: 154–157, **Hai-* ‘to go’, esp. 155)(35) の三人称単数現在中動態の形式と見做した．また，訳文の *bivʲemu*「私は分配する(?)（‘I will distribute (?)’）」は，同じく初出の動詞 *bivʲe-* の一人称単数現在能動態の形式であるという解釈に基づいている．そして，この動詞は，これまで知られていないイラン語動詞 PIr. **vi-Hu̯ad-* (?) に遡るかも知れない(36)．

結論

本稿では，文脈及び語源の両面から，トゥムシュク語 *gorsa-/gaursa-* が，コータン語 *gau'sa-* の同源語であることを論じた．8 世紀のトゥムシュク語において，この語の語義が，コータン語 *gau'sa-* と同一であったと想定するならば(37)，慶が別稿で提出した表を，表 1 のように増補することができる(38)．

の処格の形式と考えられる．この形式は，**kene* ‘in which way/manner’ の語中母音が脱落した形式と解釈できる (cf. Ogihara 2019b)．以上をまとめると，二つの指示代名詞(ここでは男性形のみ記載)及び関係詞のパラダイムは，以下のように図式化される．

語幹	m.sg.nom.	obl.(> gen.)	acc.< obl. + *-nu*	instr.-abl. < obl. + *-na*	loc. < obl. + *-ne*
ma-	*mā, mhā*	*mye*	*menu*	*mena*	*mene*
tʰa-	*tʰā, tʰa*	**tʰe*	—	*tʰena*	*tʰene*
ki-	*ki*	*kye, ke*(?)	—	—	*kne* < **kene*

(35) Sogd. *pc'y-*「正しい，適している，便利な（‘to be right, to fit, to be convenient’）」(Gharib 2004: 264) も参照．

(36) **Hu̯ad-*「運ぶ，導く（‘to carry, lead (away)’）」(Cheung 2007: 200–201) を参照．或いは，動詞 *bivʲe-* の語源は **baid-*「裂く（‘to split’）」(Cheung 2007: 2–3) に由来する **vi-baid-*(?) かも知れない．

(37) コータン語の形式と語義については，Rong and Wen (2008) を参照．

(38) 表 1 は Ching (2016: Tab. 5; 2017: Tab. 4.6) のものに，トゥムシュク語の対応語彙を追加したものである．Ching (2016) 掲載の表は吉田 (2005: 156, n. 23) 及び Rong and Wen (2008) に基づいており，2008 年 8 月にモスクワの学会で初めて学界に示された．この慶の業績の基礎の上に立つものとして Peyrot (2018) があるが，当該論文は印欧語比較言語学の観点から議論したもので，欧米の学界に，コータン語語彙の解釈には最新の研究成果による修正の必要がある点を説明している．なお，表 1 には，別稿として準備中の ‘Miscellany on the Tumshuqese documents: Part III—Words relating to cereals—’ での成果も含めている．

表１ タリム盆地周辺の古代語資料にみえる主要な糧食作物の名称

漢語	小麦	大麦*	青稞	糜	粟
ニヤ・プラークリット	*goduma*	*yavi*		?	?
亀茲語	*ysāre*	*yap*	*tsaṅkana*	*āka* (or *lyekśiye*)	*lyekśiye* (or *āka*)
古チベット語	*gros*	*nas*		*či-ćе*	*khre*
コータン語	*ganaṃ*		*rrusa*	*āysaṃ*	*gau'sa*
トゥムシュク語	?		*risa*-(?)	*arzana-*	*gorsa-/gaursa-*
ウイグル語	*buγday*	*arpa*		*üür/yür*	*qonuq/qonaq*

*広義の「大麦」には「青稞」（敦煌吐魯番文書では「青麦」，現代中国語の呼称では「青稞，裸大麦」）も含まれる．唐代以前の吐魯番出土文書に「青大麦」「青稞雑大麦」などの用語がみえることも留意される．現時点で，漢語の「大麦」と「青稞」に類似した区別が認められるのは，亀茲語のみである．

また，本稿で言及した古代イラン語からコータン語及びトゥムシュク語，それぞれへの音韻変化については，Bailey によって指摘されていたものの他に，以下の二つの音変化を明らかにした．

OIr. *-*rt*- > OKhot. -*ḍ*- = Tumsh. -*rd*- (Bailey 1950: 666)

OIr. *-*rs*- > OKhot. -*ls*- (> LKhot. -*'s*-) = Tumsh. -*rs*-

OIr. *-*rz*- > OKhot. -*lys*- (> LKhot. -*'ys*-) = Tumsh. -*rz*-

さらに，統語論の観点から見れば，トゥムシュク語 *c*(*c*)^h-「行く（'to go'）」によって支出を表す書式に並行する構文が，コータン語の様々な支出を表す会計文書で，Tumsh. *c*(*c*)^h-「行く（'to go'）」と同源のコータン語動詞 *tsu*-「行く（'to go'）」の三人称単数完了男性形 *tsve*/*tsue* を用いて表されるのは，非常に興味深い現象である(39)．このコータン語の動詞 *tsve*/*tsue* は，公文書の発出を意味する表現として使用されるが(40)，文欣 (2014) で出版された木簡文書では，支出を意味する動詞として使用されている．ここでは，同論文を文欣自身が若干改善した英語版 (Wen 2020: 199) を参照しつつ，部分的に修正した英訳と日本語訳を示す．

Tablet 2, Recto, Column 3, line 10

kūsä 1 kha 7 cu ra mara tsue biśa

'1 *kūsa*, 7 *kha* went to the village.'「1 *kūsa*, 7 *kha* が村に行った（＝支出された）.」

Tablet 2, Recto, Column 3, line 12

ttuṃjerä māśte biśīda jsārä tsve kūsa 49 kha 4

'In the Ttuṃjārā month, the total amount of grain [that] has gone: 49 *kūsa* and 4 *kha*.'

「Ttuṃjārā 月に行った（＝支出された）全ての穀物：49 *kūsa*, 4 *kha*.」

(39) タリム盆地周辺の諸民族が，この書式をどのように発展させたのかは明らかでないが，懸泉漢簡には，「出」を用いた類似の用法が広く在証されることは，良く知られている．例えば，胡・張 (2001: 77–80) の釈録する「元康四（前 26）年雞出入簿」（I 0112③: 113–131）を参照されたい．

(40) 例えば，SI P 103.10, line 8: *ttā parau tsve*「命令が（汝に）行(くだ)された（'the order went out (to you)'）」(Emmerick and Vorobyova-Desyatovskaya 1995: 138–139) を参照．

本稿で示したように，タクラマカン砂漠を取り巻くオアシス国家の経済に共通した社会的・経済的習慣を解明するために，タリム盆地周辺から出土する，様々な言語で書かれた世俗文書を比較することは，歴史学だけでなく，言語学的にも意義深いことであると言える．

略号・参考文献（ABC 順）

Bailey, Harold W. 1950 : The Tumshuq Karmavācanā. *BSOAS* 13.3, 649–670.

Bailey, Harold W. 1979 : *Dictionary of Khotan Saka*. London.

Bailey, Harold W. 1985 : Apastāk. *Acta Iranica* 24, 9–24.

Bartholomae, Christian. 1904 : *Altiranisches Wörterbuch*. Strassburg.

Berthier, Annie and Monique Cohen 2002 : Asie centrale et orientale. In Annie Berthier (ed.), *Manuscrits, xylographes, estampages–les collections orientales du département des Manuscrits: Guide*, Paris, 91–110.

BSOAS = Bulletin of the School of Oriental and African Studies

CAJ = Central Asiatic Journal

Cheung, Johnny 2007 : *Etymological dictionary of the Iranian verb*. Leiden.

Ching Chao-jung 2010 : *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. Dissertation thesis, Paris: École Pratique des Hautes Études.

慶昭蓉 2011 :「重議柘厥地望：以早期探險隊記錄與庫車出土文書爲中心」『西域文史』6, 167–189.

慶昭蓉 2012 :「略論黃文弼所發現之四件龜茲語世俗文書」黃建民等(主編)『首屆中國少數民族古籍文獻國際學術研討會論文集』民族出版社, 303–324.

Ching Chao-jung 2016 : On the names of cereals in Tocharian B. *TIES* 17, 29–64.

慶昭蓉 2017 :『吐火羅語世俗文獻與古代龜茲歷史』北京大學出版社.

Ching Chao-jung 2019 : The four cardinal directions in Tumshuqese. In Pavel B. Lurje (ed.), *Proceedings of the Eighth European Conference of Iranian Studies*, Volume 1, Saint-Petersburg, 66–86.

慶昭蓉 2022 :「磧西稅糧淵源考」『内陸アジア言語の研究』37, 63–103.

Ching Chao-jung and Ogihara Hirotoshi 2010 : Internal relationships and dating of the Tocharian B monastic accounts in the Berlin collection. 『内陸アジア言語の研究』25, 75–141.

Degener, Almut 1989 : *Khotanische Suffixe*. Stuttgart.

Dragoni, Federico 2020 : The Tumshuqese year of the goat and the Fremdzeichen x_6. *Journal Asiatique* 308.2, 215–223.

段晴 2021 :「黃文弼發現的兩件據史德語文書」『西域文史』15, 1–18.

Emmerick, Ronald E. 1985 : Tibetan loanwords in Khotanese and Khotanese loanwords in Tibetan. In Edenda Curaverunt, Gherardo Gnoli and Lionello Lanciotti (eds.), *Orienta Iosephi Tucci memoriae dicata*, Roma, 301–317.

Emmerick, Ronald E. 1989 : Khotanese and Tumshuqese. In Rüdiger Schmitt (ed.), *Compendium linguarum iranicarum*, Wiesbaden, 204–229.

Emmerick, Ronald E. and Margarita I. Vorobyova-Desyatovskaya 1995 : *Saka documents: Text volume III*. London.

Gharib, Badresaman 2004 : *Sogdian Dictionary: Sogdian—Persian—English*. Tehran.

Hitch, Doug A. 1987 : A Tumshuqese and Tocharian word of measure. *TIES* 1, 59–62.

胡平生・張德芳 2001 :『敦煌懸泉漢簡釋粹』上海古籍出版社.

Kümmel, Martin Joachim 2017 : Agricultural terms in Indo-Iranian. In Martine Robbeets and Alexander Savelyev (eds.), *Language dispersal beyond farming*, Amsterdam, 275–290.

劉子凡 2014 :「新疆考古史的一段往事：黃文弼與胡適」『東方早報』2014 年 10 月 22 日. (see also http://collection.sina.com.cn/cqyw/20141022/0958168041.shtml) [Last access: 2022/8/30]

劉子凡 2016 :「黃文弼『塔里木盆地考古記』中的 “托和沙賴文書”」『理論與史學』2, 93–100.

Maue, Dieter 2009 : *Corpus of Tumshuqese fragments: Introduction, handlist, transliteration*, TITUS (Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien, 2009 (https://titus.uni-frankfurt.de/texte/iranica/tumshuq/introduction.pdf ; https://titus.uni-frankfurt.de/texte/iranica/tumshuq/handlist.pdf ; https://titus.uni-frankfurt.de/texte/iranica/tumshuq/transliteration.pdf) [Last access: 2022/2/11]

Maue, Dieter 2016 : Tumschukische Miszellen IV/Miscellanea Tumšucica IV. *TIES* 17, 109–132.

Maue, Dieter 2022 : Konow's sign no. 3. Paper read at the workshop 'Tocharian and Iranian in the Tarim Basin and beyond', Leiden, 23/06/2022.

Maue, Dieter and Ogihara Hirotoshi 2017 : Tumschukische Miszellen III: 3. Tumshukese dental affricates. In 'Turfanforschung' (ed.), *Zur lichten Heimat: Studien zu Manichäismus, Iranistik und Zentralasienkunde im Gedenken an Werner Sundermann*, Wiesbaden, 421–432.

Morgenstierne, Georg 2003 : *A new etymological vocabulary of Pashto* [compiled and edited by Josef Elfenbein, David Neil MacKenzie and Nicholas Sims-Williams]. Wiesbaden.

Ogihara Hirotoshi 2014 : Fragments of secular documents in Tocharian A. *TIES* 15, 103–129.

Ogihara Hirotoshi 2015 : Kuchean secular documents in the *Pelliot koutchéen nouvelle série*. *TIES* 16, 81–105.

Ogihara Hirotoshi 2019a : Tumshuqese imperfect and its related forms. In Pavel B. Lurje (ed.), *Proceedings of the Eighth European Conference of Iranian studies*, Volume 1, Saint-Petersburg, 297–309.

Ogihara Hirotoshi 2019b : Tumshuqese material preserved in the French collection. Paper read at the Ninth European Conference of Iranian studies, Berlin, 10/09/2019.

Ogihara Hirotoshi 2020 : Miscellany on the Tumshuqese documents. *CAJ* 63.1–2, 11–24.

Ogihara Hirotoshi 2021 : Miscellany on the Tumshuqese documents: Part II. *Письменные памятники Востока* 18.3, 148–159.

荻原裕敏・慶昭蓉 2014 :「新出トゥムシュク語契約文書について」『内陸アジア言語の研究』29, 7–55.

Ogihara Hirotoshi and Ching Chao-jung 2017 : Some observations on the Tumshuqese documents newly published in China. In 'Turfanforschung' (ed.), *Zur lichten Heimat: Studien zu Manichäismus, Iranistik und Zentralasienkunde im Gedenken an Werner Sundermann*, Wiesbaden, 453–482.

Paul-David, M., M. Hallade and L. Hambis 1964 : *Mission Paul Pelliot: II Toumchouq*. Paris.

Pinault, Georges-Jean 1994 : Aspects du bouddhisme pratiqué au nord du désert du Taklamakan, d'après les documents tokhariens. In Fumimasa Fukui and Gérard Fussman (eds.), *Bouddhisme et cultures locales: Quelques cas de réciproques adaptations: Actes du colloque franco-japonais (Paris, 23–27 septembre 1991)*, Paris, 85–113.

Pinault, Georges-Jean 2007 : Concordance des manuscrits tokhariens du fonds Pelliot. In Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica,* Heidelberg, 163–219.

Pulleyblank, Edwin G. 1991 : *Lexicon of reconstructed pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver.

Расторгуева, Вера Сергеевна и Джой Иосифовна Эдельман 2007 : *Этимологический словарь иранских языков*, т. 3 (f–h). Moscow.

榮新江 1992 :「所謂 'Tumshuqese' 文書中的 'gyāźdi-'」『内陸アジア言語の研究』7, 1–12.

榮新江 2013 :（主編）『黄文弼所獲西域文獻論集』科學出版社.

Rong Xinjiang and Wen Xin 2008 : Newly discovered Chinese-Khotanese bilingual tallies. *Journal of Inner Asian art and archaeology* 3, 99–118.

Sims-Williams, Nicholas and James Hamilton 1990 : *Documents turco-sogdiens du IXe–Xe siècle de Touen-houang*. London.

Sims-Williams, Nicholas 2002 : Ancient Afghanistan and its invaders: Linguistic evidence from the Bactrian documents and inscriptions. In Nicholas Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian languages and peoples*, Oxford, 225–242.

Sims-Williams, Nicholas 2007 : *Bactrian documents from Northern Afghanistan II: Letters and Buddhist texts*. London.

Skjærvø, Prods O. 1987 : On the Tumshuqese *Karmavācanā* text. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 1987–1, 77–90.

Skjærvø, Prods O. 2022 : Khotan iv. The Khotanese language. In Ehsan Yarshater (ed.), *Encyclopædia Iranica*, Vol. 17, fasc. 2, Leiden, 117b–133a [online version: Cariou, Alain, Kumamoto, Hiroshi, Schluessel, Eric, Skjærvø, Prods Oktor, Maggi, Mauro and Lo Muzio, Ciro, 'KHOTAN' : in *Encyclopædia Iranica Online*, © Trustees of Columbia University in the City of New York. Consulted online on 07 August 2022 < http://dx.doi.org/10.1163/2330-4804_EIRO_COM_365009 > First published online: 2022].

TIES = Tocharian and Indo-European studies

Trombert, Éric 2000 : *Les manuscrits chinois de Koutcha: Fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale de France.* Avec la collaboration de Ideka On et Zhang Guangda. Paris.

圖木舒克市文物局・北京大學中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歴史語言研究所 2014 :「新出三件據史德語契約」『西域歴史語言研究集刊』7, 63–105.

文欣 2014 :「新疆博物館藏木板于闐語糧食支出帳考釋」『西域文史』9, 85–108.

Wen Xin 2020 : Two Khotanese account tablets and local society in pre-Islamic Khotan. *CAJ* 63.1–2, 191–237.

Witczak, Krzysztof Tomasz and L'ubomír Novák 2016 : A Pamir cereal name in Medieval Greek sources. *Studia Iranica* 45.1, 53–64.

付記　本稿は，荻原のプロジェクト ‘Research on Tumshuqese secular documents’ (CRCAO) 並びに慶の白眉プロジェクト ‘Boom of writing and rise of “Huns” in Inner Asia’ の成果の一部である．

On the Tumshuqese Noun *gorsa-/gaursa-*

OGIHARA Hirotoshi and CHING Chao-jung

Since the general description of Khotanese and Tumshuqese by R. E. Emmerick (1989) and the fundamental compiling of Tumshuqese texts by D. Maue (2009), it has been known that secular documents are the majority of Tumshuqese material. Based on Ching's re-identification (2016) of Kuchean words concerning cereal grains and Duan's publication (2021) of the Huang Wenbi Documents H111 and H112, this paper aims at the interpreation of Tumsh. *gorsa-/gaursa-* that is so far scarcely explained, suggesting that it is the Tumshuqese equivalent of Khot. *gau'sa-* ‘foxtail millet’.